

伝列集者の採声の時代
聞き手たちの時代

市橋 鐸

「やろか水」伝説後日譚

—「やろか雨」噂から「入鹿切」噂に至るまでの輻輳を記録した市橋鐸とその生徒たち—

高木 史人

一、鈴木鐸『郷土研究』に寄稿の事

市橋鐸（一八九三—一九八三）については、すでに「民俗学者としての市橋鐸——尾北の伝説研究史から——」（『口承文芸研究』二五、二〇〇二、日本口承文芸学会）にあらあら述べた。ここでは、その補論として、「やろか水」伝説及びその後日譚について述べる。

市橋鐸は、一九一九年に市橋みちと結婚する以前の姓を鈴木、名を鐸麿という（鐸は、本人が用いた筆名）。さて、鈴木鐸の名前は、早く『郷土研究』第四卷第九号（一九一六、郷土研究社）に確認できる。「報告」と名付けられた読者からの短信欄である。

○やろか水伝説 林魁一君が美濃の太田に有つたと報ぜられた「やろか水」の話（四卷三〇六頁）が、太田から僅か三里内外の下流なる自分の郷里尾州の犬山町いぬやまにも伝はつて居る。貞享四年八月二十六日の事と言つて居る。幾日も雨の降り続いた

あげく、木曾川の水は一刻一刻に増して来た。村人は心痛して怠なく用心して居るうちに、其日の真夜中頃対岸美濃国鵜沼の伊木山下の淵から、頻に「やろかやろか」と大声に呼ぶ者がある。村の人は不思議に思うてばんやりとして居るばかりであつたが其中で字井堀と云ふ処へ警戒に出て居た某と云ふ男か、恰（マツ）かもエレキにでも掛けられたやうに、其やろかやろかの声につれて「いこさばいこせ」と叫んだ。すると流は急に増して来て、見る／＼中に坂下と称する一帯の低地は水に没してしまつた。其時の記録にも「御城内にて柳の御門下より舟に乗り水の手へ往還、西谷は御馬場の上へ高塀の箭狭間やせまより曾水大波打込たり、坂下辺木津堤より往還」すと見えて居る位である。

又犬山から東南三里、池野の入鹿池いんかくいけの堤が明治元年に切れた時にも、「やろか／＼」の事があつたと老人は語り伝へて居る。（鈴木 鐸）

全文を引いた。一九一六年、鈴木鐸二三歳、國學院大學在学中

の記事である。彼は家業の医学を継ぐのを拒んで浪人をしていた時期に、勉強と称して高木敏雄『日本伝説集』（一九一三年八月三〇日刊、郷土研究社）を盗み読み、また『郷土研究』創刊（一九一三年三月一〇日創刊、郷土研究社）時からの定期購読者だったというから、林魁一の文章には、「自分の郷里」との近しさを感じて、右の投稿に及んだのだろう。文中に鈴木が挙げた林魁一の文章（『報告』『郷土研究』第四巻第五号、一九一三年）も掲出しておこう。

△太田は木曾川の北岸の地で、霖雨の時には川の水が人家へ侵入することも往々ある。それ故か次のやうな伝説が行はれて居る。今から二三百年以前の事であるが、日々の雨天続きの折に、木曾川の水上で「やろか〜」と呼ぶ声が出て、誰が呼ぶのか分からなんだ。村民の中に之に応へて「いこそばいこそ」と言ふた者があつたが、暫くして川の水が追々に増加し、終に太田町の人家に浸入する大洪水になった。此大水を称してヤロカ水と云ふ由。

「やろか水」伝説は、後年の市橋鐸にとつて大きな記念となつたに相違ない。なぜならばこの記事は、敬慕する高木敏雄だけではなく、当然、柳田國男の目にも触れたはずだからである。柳田國男と市橋鐸との直接の交渉が確認できるのは、『俳人丈艸』を介しての一九三〇年だった。けれども、鈴木鐸が報告したこの記

事を介して、両者には間接的な関係が生まれていた。というのは、この一四年後、柳田國男は『日本昔話集（上）』（一九三〇、アルス）に「やろか水」伝説を採用したのである。以下、引用する。⁽²⁾

やろか水

むかし尾張の井堀といふ村で、秋のなかばに毎日雨ばかり降つて、木曾川の水が段々に高くなり、堤が切れるかも知れないと心配して、村の人たちが起きて水番をしてゐることがありました。或夜の真夜中頃に、川の向ひの美濃の伊木山の下の淵あたりから、頻りにやろうかあ、やろうかあと呼ぶ声がありました。一同は唯不思議に思ふばかりで、どうすることも出来ずに顔を見合せてゐましたが、いつ迄も其やろうかあといふ声や止まないで、しまひには怖ろしくなつて人夫の中の一人が、思はず知らず高い声で、いこそばいこそえと言つてしまひました。さうすると忽ち大水がどつと押し寄せて、見てゐるうちに此辺の田が全部、水の下になつたといふことでもあります。それで今でも其時の洪水をやろか水と謂つてをります。今から二百五十年ほど前の、貞享四年の事だといふ人がありますが、この大川の附近には、他にもさういふ話が村々にあるさうです（尾張丹羽郡）。

これを、先に紹介した林魁一及び鈴木鐸の記事と比較すると、場所から推して話は鈴木鐸の記事に大きく依存しているけれども、

その細部には随分と手が加えられている。鈴木近世の文献記録への目配りは捨象されて、僅かに「今から二百五十年ほど前の、貞享四年の事だといふ人がありますが」とだけある。また、林魁一の記した美濃太田の例と鈴木近世の記した入鹿池の例とは併合されて「この大川の附近には、他にもさういふ話が村々にあるさうです」と、個々の地名が省かれていた。歴史的な記述の排除、類話紹介の削除の一方、子供向けに分かりやすいように漢字には総ふりがなが付され、表現も改められている。たとえば、「むかし尾張の井堀といふ村で」という書き始めは、「昔話集」に相応しい語り口にしたのだろう。また、「いこさばいこせ」と呼ばれる「警戒に出て居た某と云ふ男」(林の文では「村民」の一人)が柳田の文では「人夫の中の一人」とすっきりとした言い方になっている。柳田が読みやすさを意識して文章を書いたことがよく分かる。⁽³⁾

二、市橋鐸『曳馬』を「郷土研究号」とする事

市橋鐸は一九二七年から一九四一年まで愛知県小牧中学校の国漢科の教員だった。したがって、柳田國男『日本昔話集』を手にとった当時は、中学校教師であった。この「やるか水」伝説が誘い水になったのか、市橋はこの中学校で生徒を使った資料収集を試みた。⁽⁴⁾小牧中学校は、一九二四年四月開校、一九二九年三月に第一期生を送り出した若々しい学校だった。そうして、一九二七年四月に着任した国漢教師の市橋は一貫して校友会誌『曳馬』(この誌名は第三号からで最初は『校友会雑誌』と称した)

の「編輯兼発行人」という立場にあった。今、筆者の手元には、一九三〇年七月刊の第一号から一九三八年二月刊の第一二号までの一〇冊(第一、三、四、五、六、八、九、一〇、一一、一二号)がある。年二冊ずつの刊行のようである。この校友会誌『曳馬』が、市橋鐸と生徒たちとの伝説・伝承報告の場として活用された。

たとえば、一九二八年二月刊の『校友会雑誌』第一号において、すでに巻末に「入鹿物語 山姥物語」と題した全一〇頁の記事が掲載されている。これは、市橋鐸が所蔵していた二書を中心に翻刻し、頭注を添えて紹介したもので、尾北の現犬山市羽黒、楽田、丹羽郡大口町一帯を中心に伝えられたいわゆる「鍛冶屋の婆」型説話の物語である(この物語について、筆者はいずれ機会を改めて論じたい)。また、一九三〇年七月刊の『曳馬』第三号には「郷土新聞第一号」という二頁の記事がみえる。記事は坪内逍遙の父、祖父、曾祖父が小牧出身であることを生徒が調べたという報告、近隣の城郭や孝女の碑の紹介などである。この企画が大きく特集されたのが『曳馬』第五号(一九三二年二月刊)である。架蔵『曳馬』第五号は市橋鐸旧蔵本であり、表紙には市橋の朱筆で「(入鹿池聞書)」とある。表紙裏上段の「目次」には、「表紙の文字：彦坂校長／入鹿切聞書／亀蔵事件：丹羽正治／陶器と陶村との関係：鈴木泰治／楽田村の蜜柑の研究：水野正夫・長瀬敬正・奥村貴典／巨石文化に就て：大澤八郎／尾張富士石上祭の唄：吉野守／西春小木古墳群の現状：丹羽次郎／犬山巷談…今井正治【以下略】」とあり、七八頁中六〇頁がこの特集に割

かれており、表紙裏下段には以下のように記されていた。

郷土研究号

近頃の流行を追うてゐるなど思はれては寂しい過去を持つ私達である。こゝに心をむけたのは、あまりにもこの方面が閑却されてゐた日であつた。世の流に棹さすことを知らない私達は、いたづらな物好きする閑人と冷眼視されてきた。だが資料だけは苦痛を忍んで聚集してゐた。時は移つた。人様が言はねば損の様に言うて下さる時代となつた。

過日さ、やかだつたけれど郷土室在庫品の陳列会を開いて世間的なろしをあげた私達は、さらに曳馬五号の本文を頂戴して、郷土研究号と銘うつて、第二のろしをあげ得る日を迎へたことを喜びたい。

これが多少でも将来に、この地方郷土誌の資料となり得るなれば幸である。

筆者は卒業生、在校生のオンパレードである。

掲載するに当つては多方面のものをといふ心組で選んでおいた。その成績については、謹んで斯界の先輩諸先生の批判に待ちたいと思ふ。

おそらく市橋が記したのであろう。そうして、この「郷土研究号」の中心が慶応四年（この年は、九月に明治と改元）五月二三日払曉に起きた「入鹿切聞書」にあつたことは、その「目次」順

からみても、執筆量（二頁から三七頁まで）からみても、間違いない。⁽⁶⁾ちなみに『曳馬』第四号（一九三〇年二月刊）所載「郷土新聞第二号」（二頁分）では、トップ記事が「入鹿池溺死人明細記」であり、第五号は、第四号の話題を發展させたものとみることができよう。

さて、ここで、鈴木鐸が一九一六年に寄稿した「やろか水伝説」の記事を思い起こしたい。あの末尾に鈴木は、「又犬山から東南三里、池野の入鹿池の堤が明治元年に切れた時にも、「やろか〜」の事があつたと老人は語り伝えて居る」と書き記していた。ところが、柳田國男から「御礼本」として鈴木の手元に届けられたのかもしれない『日本昔話集』では、「この大川の附近には、他にもさういふ話が村々にあるさうです」とそつげなくやり過ごされてしまつていた。柳田國男の『日本昔話集』の刊行は一九三〇年三月。市橋鐸らの「入鹿切聞書」刊行は一九三一年一二月。この近接した時間に連関を窺うとするならば、ここで市橋が目論んだのは、柳田に無視されてしまつた入鹿池の「やろか水」伝説を生徒の聞き書きによる資料を通して、再度、世間に送り出すことだつたらう。⁽⁷⁾

三、「やろか水」伝説、じつは「やろか雨」噂であつた事

——名前という話型（一）——

以下、「入鹿切聞書」の広範な内容から「やろか水」伝説にかかわる部分を紹介し、検討したい。「やろか水」伝説は洪水直前

の「やろか」と呼ばう予兆から始まるが、これを予兆としない話も生徒によって書き留められていた。

①入鹿の大池のきれる前に林三といふ人の親が入鹿池の方へいもを売りに行つた時に雨が降つていた。その時池のいりの上でみのを着て『うまいもの食べて楽しく暮せどうせ此の世は五月まで』と言つて居つたのを家へ帰つて話したその後ぢきに池のつゝ、みがされたそうであります。(小牧町 鈴木明)

②丁度三十日間の間雨が降つて池には水が一ぱいにたまつた。しかも田には水が有りあまつて水を出す事も出来ず犬山の成瀬家に願ひ出て土俵を積む様に願ひ出た。そこで多くの人足を集めて土俵を積み始めた、しかし雨は降るばかりで三十日頃池が切れて水があふれ出た。これが池切れの原因である。丁度池が切れる前に人足は富士山「尾張富士」以下「内は高木注」に上つてしまつた。そして陣羽織を着た武士が箒を肩にして何処かに行つてしまつたのを見たさうだ。これが池の主が多分出て行つたらうと云はれて居る、又或る一説によれば水のきれる前に池面から火の玉が上つたと云はれて居る。

これも池の主が出たと云はれて居る。(犬山町 山口恵暁)

③その前即ち入鹿池氾濫の前に東方に方つて火柱が立つた。それで人々は何だか悪い予感に襲はれて居たと、果して数日過ぎで入鹿池が氾濫して水が流れて来た、「中略」、以上は当時十二歳であつたおばあさんのお話し。(自宅のおばあさんならず)(大

口村 今枝秀雄)

④入鹿池の杓が出来た時に池の切れるのを防ぐ為に或る有名な大工によりて二匹の池の主を作つて池の中に置かした。其の主は馬の形をしてゐたといはれてゐる。所が明治元年五月に至り降り続く雨の為に池の水はだんぐと増してきた。二匹の主は二のみに二間も水を飲んだが水は増すばかりだから遂に十三日の夜明方に雷の落ちたやうな大きな音をどん、ぐと二つ立て、天へ上つて行つた。主の昇天によつて一ぱいはばんだ池の水はとうくつゝ、みを切つてもものすく流れ出た。此のつゝ、みの切れた為に数百人の人を溺死させ五六百戸の家(マ)の流失させた。此の話は今でも当時災害を受けたお婆さん達は実と思つてゐる。(羽黒村 小島金男)

⑤此の池切れは左甚五郎が作つたやなぎのリヨウが出てゐつたから此うした被害があつたのだと言ふ伝説ありリヨウは池の主。(羽黒村) 長谷川一郎)

最後のカッコ内の氏名が生徒である。これらを見ると、「やろか水」の原因を、蓑を纏つた者の予言、箒を背負つた武士が去つていったという目撃、火の玉、火柱の目撃、有名な大工の作つた池の主(二匹の馬)の昇天、左甚五郎の作つたりヨウ(龍)が出て行つた、と視覚や聴覚などによつて感じたことをさまざまに解釈し説明している。つまり「やろか水」伝説は、さまざまに解説の中のひとつとして存在していた。けれども、これらのいくつか

の言説の中から「やろか水」伝説が主流派、多数派の位置を占めてくる。その原因は、この「入鹿切」を土地の人々が言い慣わしていた呼び名にあることが、小牧中学校の生徒達の記録から仄見えてくる。たとえば、先に引用した生徒達の聞き書き資料の①②③には「やろか水」伝説が説かれていないにもかかわらず「やろか雨のこと」という題名がつけられている(④は「入鹿池の主」、⑤は「伝説」と題されている)。どうやら入鹿切の災害を当時の尾北の人々は、長雨が齎したという原因から「やろか雨」という語で表わしていたようである。名前という話型の力を考えてみたい。(8)筆者はここまで「やろか水」伝説と呼んできたが、それは林堉一と市橋鐸とが『郷土研究』に報告し、柳田國男が『日本昔話集(上)』に掲載した木曾川の「洪水」の水高の多さに由来する伝説の呼び名であり、ここ入鹿池では「やろか雨」伝説と呼ぶべきだったろう。口承を研究する際には、コトバ、名辞、呼び名には十分に留意しなければならなかった。入鹿切の原因についてさまざまな言説が行き交う中で、人々が入鹿切という事件そのものを呼ぶときに「やろか雨」という新語を選び取っていき、そこで人々は否応なしに「やろか雨」という語の謂われについて考えるように仕向けられていったのではなからうか。この仕向け方が、自然と「やろか雨」伝説を多数派にしていた可能性がある。

以下は、小牧中学校の生徒たちが報告した「やろか雨」伝説である。

- ⑥慶応四年五月田植もすむかすまぬ、池切れより二十日程前のこと、尾張富士の頂で誰だかは知らぬが声高らかに「やろかくくく」と盛んに叫ぶ者があつた。み代の土手(池の堤)から「いこさばいこせ」と怒鳴つた。すると其の日から大雨が降り出した。降るはく聞も無しに降り続いたさうだ今井を流れてゐる成沢川は毎日濁り水で一ぱいで橋といふ橋は大概流されてしまつた、西側と東側との往来は杜絶されてしまつた。こういう激烈な雨降りが二十日間も続いたさうだ。先に富士山頂で叫んだ者は神様でこれは神様の仕業だといひ、この雨の事を『やろか雨』と言つた。(今井村 水野正夫)
- ⑦入鹿池が切れそうになつた時池の主が大音響でやろか!!と叫んだそしたら他の池の神様がよこさばよこせと叫び返した次いて水がど——と来たと。だからやろか雨と云ふとの話(自宅のばあさんの話当時四才)(大口村 今枝秀雄)
- ⑧世人は、此の雨の事を遣らうが、雨と云つたのだ、僕の祖父の知人が「洪水の直前に天の方から何だか知らないが怪体な物が此の土地に向つて遣らうか、遣らうか」と云つた怪しの音を聞いた其処で祖父の知人が「よこさば、よこせ」と云つて之に答へたさうである、この事があつてから七日七夜の間続いて降つたと云ふ事である。然しこの伝へも保証の限りではない、(大口村) 寺沢幸夫

話を聞き書きした生徒の住む今井村(現犬山市今井)と大口村

(現丹羽郡大口町)とはかなり距離があるから「やろか雨」の話は、地域的な広がりがあるようである。そうして、そのいずれもが「やろか雨」という呼び名の謂われを説明するように、つまり呼び名由来譚として記述されているのは、さきほどの名前という話型への関心から大いに注意したいところである。

けれども、まだ大切な問題があるように思う。それは、今まで筆者が「やろか雨」を「伝説」だと呼んでいたことについてである。⑥の話では尾張富士の上の何者かからから土手にいる何者かへの応答、⑦の話は神同士の会話だったが、⑧の話では、「生徒の祖父の知人」がよこさば、よこせと言ったことになっている。現今の「伝説」の用法は、こういう身近な人の体験談や伝聞談を積極的に含んでいたろうか。ひよつとするとこれは、現今、既知の「噂」や未知の「世間話」などの称呼で迎え取っているものだったのではないか。二〇〇七年の我々からすると、一八六八(慶応四)年は十分に伝説、歴史の領域だと思われるが、一九三〇年当時では、それは六二年前の出来事なのである。たとえば、二〇〇七年から六二年前は一九四五(昭和二〇)年である。戦争に纏わる話の諸相を思い起こしたい。いまここで七〇歳、八〇歳の老人から聞き書きをして聞いた六二年前の話を、「伝説」という称呼で処理しているのかという問題である。すなわち、この話は「やろか雨」伝説ではなく、「やろか雨」噂なのだと理解しておくべきだろう。⁽⁹⁾

四、「やろか雨」噂から「入鹿切」噂まで輻輳する事

——名前という話型(二)

そうして、「やろか雨」噂の周囲には、当然のことながらその不思議な噂とは異なる、いかにも現実的な噂も多く交わされていたはずである。⁽¹⁰⁾小牧中学校の生徒達の聞き書きは、口承文芸研究に携わる者がフィールドにおいて陥りがちな、不思議な噂に偏した聞き書きをしていない。たとえば、先に掲げた②の記事の前半の、水を排出もできず土俵を積み上げたのが「池切れの原因」だというのは、不思議な噂には入らない現実的な噂だと思う。それは同様に、

⑨丁度五月の上旬である、池が切れると云ふ疑から奉行によつて、堤防の上に土俵を積んで居た、五月十二日の日当手当がつかなくて、多くのあんこ、「土方のこと」は、しかたなく家へ帰つて来た、其の日から丁度地震の如く、ゆすつてごう／＼とうなつて居た。十三日午前二時、すさまじい勢を以て池はきれてしまった。(「羽黒村」河村行雄)

⑩切れる前一週間どしやぶりに降つた。当時杵が一本であつたので九十八谷から出る水は刻々増すばかりでどう／＼と音をたて、ゐたので堤防を壊はす話しは出たが神尾の地主田地の悪なるを恐れて昼夜堤防の上に土俵をし後には土俵しに出ない者は罰金を取られたが五月二十六日?(里芋の葉がひらいた

頃) 八つ時分堤防決壊した。(「羽黒村」 長谷川一郎)

⑩入鹿の池のさしわたしは半里である、小牧代官、水野代官両方で普請をした、小牧代官はめつた、「滅多カ」の人で堤防が切れそうになつても逃げよといふことを云はなんだから多くの人死んだ。(「千秋村」 青山勇)

の生徒の聞き書きも不思議な噂というよりは、現実的な噂といえよう。たとえば、⑨の地震のように揺れて音がした、⑩の音を立てていたという話は、事件当時の杖守りだった天野浅右衛門の書き残した「入鹿池諸事書留帳」(『曳馬』第五号に翻刻) 中の「其十二日夜七ツ時より地ひゞきのいたすにおどろき人」に合致するし、人足を雇って「かさ置」をしたとの記述もある。けれども、⑩の神尾の地主が田が悪くなることを恐れたとの話や、⑪の小牧代官の処置のまずさが犠牲者を多くしたとの話は文献記録からは確認できないのでここでは現実的な噂として捉えておく。

これらの現実的な噂では②「池切れ」、⑨「池が切れる」、⑩「決壊」、⑪「堤防が切れそうに」などと、「切れる」もしくは「決壊」という堤が切れることを指す語が用いられて記述されている。これがもとの伝承者の用いた語であるのか、それとも生徒の記述に際して用いた語なのかは分からないが、そのいずれかの時点で、たとえ無意識的であったにせよ、これらの現実的な噂を話型として括るときに選び取られた語だったのだろう。それからして、これらの現実的な噂は長雨という不思議な現象から命名され

た「やろか雨」噂ではなく、池が切れた現象に重きを置き、人事への興味も含んだ、入鹿池という人工の溜池への興味から選ばれただろう名辞、「入鹿切」噂であるといえよう。

かくして、①から⑩に及ぶさまざまな噂の群れは、その一つの噂だけでは話の場が持ちこたえられず、人々が異なる噂を互いに聞かせ聞かせられしつつ交錯、輻輳していく中で、話の場も活気を呈して、噂の全体によってあのときの出来事が、ある時は「やろか雨」噂に偏しつつ、またある時は「入鹿切」噂に偏しつつ、またある時はそのお互いが拮抗しつつ…、幾度も幾度も人々の口から出て耳に入りを繰り返して、そうこうするうちに印象的な呼び名とそれに纏わる印象的な出来事とが人々の脳裏に留められ記憶され、断片の寄せ集めから集団的な纏まりへと、ふわふわと揺れ動く噂の群れから一定の秩序を有する歴史的な言説すなわち伝説の群れへと連なっていくたものではなかったろうか。一方、「入鹿池聞書」の文字群は、これらの噂を伝説化するいとなみでもあったろう。

市橋鐸が生徒達に出した宿題の成果を纏めた『曳馬』第五号「郷土研究号」就中「入鹿池聞書」の語群を紐解きながら、数多の噂を幅広く集めた資料の性質の検討とその活用すなわち読み方の一端をば示そうとした。市橋が試みた、これらの一見雑多にも思われる資料の提示のし方は、じつは、いまここにおいても十分に検討に値するのではないか。また、筆者が試みた資料の読み方

は、たとえば、かつていくつかの大学で活発に活動していた学生研究会による記録や資料集を再評価するための指標の一つになり得ないだろうか。⁽¹⁾以上が、「郷土研究の盛んなる今日、この一編が如何なる反響を呼び起すか、ほ、笑みながら、それを待ちたいと思ふ」と述べた一九三二年の市橋鐸に対する、七十六年後に尾北の地に勤務する者からのささやかな感想である。

注

- (1) 『郷土研究』第四卷第二二号(一九二六、郷土研究社)所載「郷土研究」寄稿者及び通信者芳名」に鈴木鐸の名前がある。なお、「郷土研究」第一卷第一号は巻頭から順に、高木敏雄「郷土研究の本領」、川村杏樹「巫女考」、久米長目「山人外伝資料」、赤峯太郎「今昔物語の研究」の四論文が掲載された。川村、久米は柳田の筆名、赤峯は高木の筆名である(赤峯を中山太郎とするは誤り)。本格的論文で本名を名乗ったのは高木のみ、創刊号からの読者鈴木鐸に取って高木は大きな存在として認識されたろう。また、高木敏雄『日本伝説集』の郷土研究社版は、表紙に「分類総目次解説索引附」という副題が付されていた。この副題のもたらす伝説研究の集大成らしき趣によっても、鈴木鐸には高木敏雄の伝説研究が大きく印象つけられただろう。
- (2) 『柳田國男全集』第五卷、一九九八、筑摩書房)で「異装架蔵『日本昔話集』」によった。本書は、石井正己が「解題」
- (3) だが、この話は伝説臭さが抜けず、角川文庫改訂版『日本の昔話』(一九六〇)では、削除された。
- (4) 市橋鐸「序」(福田祥男「増補愛知県伝説集」一九七四、名古屋泰文堂)によれば、小牧中学校に興味が同じな同僚がいたので、全生徒の宿題にして伝説を集めさせ、「すでに他の本に発表されている話は避けること」「短かくてもよいから、爺さんや婆さんから直接聞いて、その方の名前と年齢を書き添えること」などを留意させたという。また、その成果は「交友会誌に発表、さらにそれだけを抜刷して『尾北巷談』と題して刊行し」、「この学校では五冊ほどこの種の抜刷を出したと覚えている」という。
- (5) 引用文中の「郷土室」について、市橋は「郷土室をつくったり、刊行物を出したりした」と述べている(「自分だけの長寿法」(傘寿)一九七三、自刊)。
- (6) 「入鹿切聞書」冒頭の「はしがき」には次のように記されている。「○尾張の国の東北隅、黒平、本宮、小富士の山々にとりかこまれてある入鹿池を壊滅した時の災害状況の聞書である。／○明治元年(慶応四年九月改元)のこと故

実際を見聞せられた方々も多い。その方々にお聴きしての記録、そのまゝの報告が中心をなしてゐる。／＼第一編は入鹿池の概念を知つて頂く為のもの、第二編は故老の覚書、第三編は生徒達の間書、第四、五編は関係文書の翻刻である。／＼入鹿切を主題とするために杖そのものに就いての文献ははぶいた。資料がないのではない。立派にたくさん現存してるが、本間書が中心を失ふためと頁数との関係で割愛した。／＼本間書は入鹿切資料としては最初の文献である。本校生徒のすべてがその災害を知つてゐる事実と、かつ又一方には入鹿池の恩恵を受けてゐる状態より、この試みは効果あり、意義あるものと信ずる。／＼郷土研究の盛んなる今日、この一編が如何なる反響を呼び起すか、ほ、笑みながら、それを待ちたいと思ふ。(たく)。市橋鐸の意気込みが伝わってくる文章である。ちなみに、「入鹿切」について、市橋鐸は少年時代、近所の小野木鉦三翁の体験談を聞いていた。この「入鹿切間書」第二編には、翁自身の手になる「小野木鉦三翁手記」も収録されている。

(7) ただし、注6に掲げた「はしがき」にあるように、入鹿池は木曾川よりも小牧中学校の生徒の通学地域に近く、生徒に馴染みのある池だったことも大きい。小牧中学校の生徒を使った資料蒐集がより容易であつたことも、大きく関係しているはずである。入鹿池は、現在の愛知県犬山市池野(野外博物館の明治村が隣接)にある寛永五年築造の尾北

随一(満濃池と同じ規模)の溜池である。入鹿切とは、「入鹿切間書」第一編「入鹿池」によると、一八六八(慶応四)年四月上旬からの長雨により五月一三日払曉に池が決壊したもので、流失家屋八〇七、浸水家屋一〇一七〇九、死者九四一、負傷者一四七二、流没耕地八四八〇町五反二〇歩の大きな被害をもたらした。

(8) 高木史人「悦ばしき話型」(高木信・安藤徹編『テキストへの性愛術』二〇〇〇、森話社)において「名前という話型」を考えた。

(9) ただし、伝説と世間話や噂とは重複する要素もある。

(10) 不思議な噂と現実的な噂とは、立論上相対的に名づけたものである。矢野敬一によると、新潟県のある村落では、大正時代ある家が裕福になつたことを「異人殺し(座頭殺し)」の不思議な噂で説明する一方、その家の中では先代当主の「儉約力行」のためと説明していた。ところが、実際には先代当主が家業(林業)に関する情報収集ルート(材木相場の逸早い動向など)を持つていたことが大きく、「儉約力行」も現実的な噂の一つだったという(矢野敬一「家の盛衰——「異人殺し」のフォークロー——」(『口承文芸研究』第十五号、一九九二、日本口承文芸学会)。

(11) 國學院大學民俗文学研究会・國學院大學説話研究会OB有志編『学生研究会による昔話研究の50年』二〇〇五、自刊(たかぎ・ふみと/名古屋経済大学)